



なごや「聖歌」だより 12月号'08

すべては「聖体礼儀」に

ニコライ堂でイオシフ大窪神父さまの埋葬式がありました。埋葬式に先だって「聖体礼儀」が行われました。

ドーム中央に置かれた白い棺。白い祭服の神品が囲み、色とりどりの花々が飾られ、人々の手にロウソクが明るくともっていました。優しく美しい聖歌が香炉の煙とともに昇ってゆきました。

「聖、聖、聖なる神、主サワオフ…」天使とともに歌います。「取りて食らえ、これ我が体…」「これ我が新約の血…」、最後の晩餐のハリストスのことば。そして、領聖に並ぶ長い列。私たちは確かに、それを信じて集い、祈り、ここに神の国がある、その中央で捧げるのはハリストス、そのご聖体を分かち合っているのだ、という力強い思いがこみあげてきました。親しい方との別れは悲しいけれども、将来、必ず復活して神の国で再会することをともに信じている、ここに顕れている、そこには神の国のたとえようもない美しさがありました。

大窪神父さまは永眠の3日前まで聖体礼儀を行われたそうです。聖体礼儀のたびに、神の国を顕し、人々を救いに招く、すべての教会に、すべてのクリスチャンに課せられた使命をあらためて教えられたように思います。

聖体礼儀のたびに現れる神の国は、そ



写真：斉藤求

れが立派な大聖堂であっても、名古屋や半田の小さな教会であっても、金沢の民家の一室であっても、それぞれに比類ない美しさがあります。その美しさは神が与えたものです。

ただそれを顕すためには人間の努力も忘れてはなりません。私たちの努力など、神の与えるものに比べればほんの小さなものですが、何もしない、何も求めないのでは何も与えられません。神は小さな努力に大きく報いてくださいます。この時も、聖歌隊は時間の許す限り練習を重ねていました。

「お祈りだから練習は必要ない」という意見もありますが、「お祈りだからこそ練習が必要」なのです。練習は技術の向上だけではありません。何度も歌い込んで初めて内容の理解が深まり、聖師父たちのメッセージが自分たちの歌となり、彼らとともに歌い祈ることができるからです。

聖歌練習

♪名古屋：毎主日の聖体礼儀後に、「降誕祭」の練習を行います。

○21日代式後に練習。この日はおみがきもあります。

♪半田：12月10日(水)11:45分頃から。降誕祭の練習をします。

クリスマス特別講演会

正教会の礼拝と聖歌ー

ー初代教会からラフマニノフまでー

12月11日(木)18:00、国際センター3階、第2研修室
講師：松島純子、入場無料

正教会は伝統を守る教会です。現在行われている礼拝にもユダヤ教から引き継がれたもの、初代教会時代のもの、全地公会時代に生まれたもの、パレスティナやコンスタンティノーブルの街の教会や修道院の聖歌など、さまざまなものが生きています。3世紀から歌われている聖歌「聖にして福たる(フォス・イローン)」を異なる時代、地域のバージョンで聞き比べながら、ビザンティンの礼拝と聖歌の成立、さらにロシアでラフマニノフやチャイコフスキーなどの近代合唱聖歌へと発展した歴史を概観し、キリスト教の「伝統」とは何かを考えます。

12月の指揮当番	21日	練習	
7日	ビーメン松島	24日	3人で分担
14日	エレナ広石	28日	マリア松島

奉神礼の伝統シリーズ 4

奉神礼と聖書

聖詠に親しむ

降誕祭早課ポロキメンから
4 調

109聖詠(110詩編) 3、4、1節

我黎明の前に爾を産めり、
主は誓いて悔いず

(句) 主我が主に謂へり、爾我が
右に坐して、我が爾の敵を爾の足
の台と為すに迄れ。

このポロキメンの句、「主我が主に謂へり、爾我が右に坐して、我が爾の敵を爾の足の台と為すに迄れ(主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ)」は、イイススが神の子で、救世主であり、栄光を受けることを示して、イイススご自身が述べたことばとして福音書に収録されています(マトフェイ22:41-45、マルコ12:35-37、ルカ20:41-44)。また、使徒行実でも、聖使徒ペトルが同じ句を引用して、「あなたがたが十字架につけて殺したイイススを、神は主とし、メシアとなさったのです」と力強く宣言しています。

「主は誓いを立てて、み心を変えられることはない、あなたはメルキゼデクの位にしたがって、とこしえに祭司である(4)」と続き、イイススが永遠の祭司としてこの世に遣わされたことが告げられます。

サレムの王メルキゼデクは大祭司としてアブラハムを祝福しました(創世記14:18-20)。エウレイ書(ヘブライ人への手紙)7章には「メルキゼデクはサレムの王、いと高き神の祭司、…義の王、またサレムすなわち平和の王、父もなく母もなく、系図もなく、また渉外の肇もなく、生命の終わりもなく神の子に似たものであって、永遠の祭司であった(7:1-3)」とあります。

イイススの時代、律法に従って神殿で償いの捧げものをするのはレビ族の祭司の役目でした。毎年捧げものを繰り返さなければならぬレビ族の祭司とは異なり、イイススは、ただ一回、すべてのための捧げものを行うために永遠の祭司として来られました。レビ族の祖先レビよりずっと以前、曾祖父アブラハムの時に、何の係累もなく突然現れた大祭司メルキゼデクこそが、まことの大祭司イイススの預象であると歌われています。

「我黎明の前に爾を産めり、主は誓いて悔いず」イイススは「世の終わりに、ただ一度、ご自身をいけにえとして捧げて罪を取り去るために、現れてくださいました(エウレイ9:26)。「イイススは永遠に生きていて、人々のために執り成しをしておられるので、ご自身を通して神に近づく人たちを完全に救うことがおできになります(7:25)」。

イイススが人間の体をとって、お生まれになり、救いのわざが始まったことを祝うのが「降誕祭」です。

この聖詠は降誕祭の奉事の中で、早課ポロキメンだけでなく、早課「讃歌」、聖体礼儀第3アンティフォンの句、聖入句として繰り返し唱えられます。

参考資料:『聖詠経』、新共同訳聖書『詩編』、*Christ in the Palms* Patrick Henry Readon, *Orthodox Study Bible*, 正基礎講座テキスト『奉神礼』(トマス・ホブコ神父)、『詩編』フランススコ会訳、『正教会の音楽』(J.V. Gardner)

ポロキメンの歌い方

ポロキメンにも8つの調に従ったメロディがあって、誦経者と掛け合いで歌われます。日本では通常、誦経者が「まっすぐに」読み、聖歌隊がメロディをつけて歌います。祭日や早課の場合は楽譜がないために、聖歌隊もまっすぐに歌うことが多いようです。

例1と例2はまっすぐに歌う場合の例です。例1では最後が「クイズ」のように聞こえて気になったので、例2では、「悔いず」の「悔」にアクセントがくるように「ド」と「レ」の位置を少し変えてみました。

次に、このポロキメンは4調と指定されているので、例3では主日ポロキメン4調のメロディを当てはめてみました。この場合もことばのイントネーションに留意します。もっとよい方法があるかもしれません。例4はアメリカでよく歌われているセルビア調のメロディです。

どれで歌わねばならないという規則はありません。ほかに色々できます。

例1
しのめ
我黎明の前に腹より爾を生めり、主は誓いて 悔いず

例2
しのめ
我黎明の前に腹より爾を生めり、主は誓いて 悔いず

例3
しのめ
我黎明の前に腹より爾を生めり、主はちかいて - 悔いず
4調 オビホード

例4
しのめ
我黎明の前に腹より爾を生めり、主は 誓いて 悔いず
4調 セルビア調

*オビホードとはロシア『標準聖歌集』の意味で、一般に19世紀にドイツの賛美歌を真似て作られたリヴォフ・パフメチェフ版オビホードを言い、当時もっとも一般的に歌われていたものです。ニコライ大主教が日本に紹介した聖歌も大半がここから編曲されています。

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が開けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料